

鳥取県東部におけるロードキル発生状況と要因に関する考察

環境学部 4年 笈川慶司

野生動物の行動圏が拡大する時期とロードキル多発時期が重なっていることが多くのロードキルの報告でされている。しかし、これらの報告の多くは道路管理者によって作成されたロードキル記録であるため、同定精度の低さと同時に被害動物の特性に関する情報の欠如が問題視されている。本研究は、直接被害動物を計測することで正確な情報を得るとともに、これまでのロードキルに関する研究をもとにロードキル発生要因として考えられる仮説を計測した記録の情報によって検討するものである。

先行研究からロードキルの増加時期に繁殖期や分散期といった行動圏を広げる時期と重なるため、繁殖期や行動パターンなどの生態的特徴がロードキルの発生要因とされている。この種の生態的特性がロードキルの発生要因であれば、ロードキルには雌雄の行動圏の差や生活史の差による事故件数の変動があるのではないかと仮説を立てた。

仮説を検証するため鳥取県東部にある道路において道路維持業務中に回収された動物死骸を直接観察し、性別やサイズ比の確認を行った。2021年5月17日~2022年3月30日は鳥取市役所神谷清掃工場、2022年5月11日~10月28日は鳥取県東部環境クリーンセンターにおいて計測を行った。動物死骸の計測方法としては日本哺乳類学会：哺乳類標本の取り扱いに関するガイドラインを参考に哺乳類の外部計測値として頭胴長：吻端から肛門（HB：Head and Body length）、尾長：肛門（の正中部）から尾端まで（LTa：Length of Tail anus）、体重を計測した。性別の判別は生殖器で判別し、シベリアイタチ（*Mustela sibirica*）などの性的二型により雌雄で体格の差が著しい種は頭胴長、体重などから判別を行った。

以下のような結果が得られた。①二ホンアナグマ（*Meles anakuma*）は亜成獣の分散期と雄の成獣の行動圏が最大になる発情期である5~7月に雄の事故件数が雌の事故件数を上回っており、冬ごもり期間である11~3月は事故件数が減少していた。②ホンダタヌキ（*Nyctereutes procyonoides viverrinus*）は亜成獣の独立期と成獣の冬に備えた摂食のために行動圏を拡大する時期に亜成獣と成獣がともに事故件数を増加させていた。③ホンダテン（*Martes melampus melampus*）は年間を通して雌よりも行動圏が広い雄の事故件数が多かった。

以上の結果からロードキルの発生には種の生態的特徴が要因という仮説を支持するものであった。